母子相互関係の乳児期から幼児期への変容

岡　宏子（聖心女子大学）

目的と課題

母子相互関係と子の精神発達との関連の仕方について，乳児期の間に成立，展開されてきた相互関係は，その後の子の発達に伴って変容をとげていくのが一般的なことと考えられるが，この子どもの成長に伴う関係の変化は，初期の両者の関係の型といかなる関連があるのか。また，乳児期の母子相互関係と子の精神発達との間にみられる関係は，その後も，同じような関係の仕方をするのか，それとも，関係の仕方そのものも変化するのか。

このような設問のもとでの母子相互関係の変容と，子の発達との関係の変化または連続性の検討が，この研究の三年連続のテーマであった。

本年度はそのなかで，第一年度に一応分析を終えた乳児期（9カ月～1歳3カ月）における母子関係が，2歳の時点では，どういう関係となるのか，その連続性または変化の仕方を中心に分析を行なうことを目的課題とした。

研究の手続きと分析の順序

(1) 2歳児の親の養育態度および意識について問う質問紙の作製

(2) 2歳児の精神発達をチェックする詳細な発達テストの作製

(3) 母―子100組への(1)および(2)の調査実施

(4) 調査結果による(1)および(2)の関連分析

(5) (4)でみられる関係を，昨年度の乳児期におこる母子関係と比較検討

(6) 今度の課題の検討

の6段階で行なうこととした。

結果と分析

(1) 親の側の条件である子への働きかけとしての各種養育態度と意識に関する質問を作製した。その際に，乳児期で見出した養育態度および意識のカテゴリーに，そのまま対応させ，比較しうる質問を作製する必要があるが，子の成長とともに，母の子への働きかけが具体的に異なってくるため，親が2歳の子に実際にとる行動を問いながら，乳児期でのそれと対応し，比較するに適するか否かの検討に重点がおかれた。

(2) 子の精神発達をチェックする質問も，(1)と同様に既製テストでは先述の関係の比較に適切性を欠くため，新たに独自のものを作製した。

(3) (1)および(2)の質問紙を，次のような対象に配布，母親自身に記入させ回収した。対象は，東京在住の山手地区中産の家庭（主婦専業）と下町地区の仕事をもち，子を保育園に託している家庭。子の年齢は両者とも2歳～2歳6カ月。

回収後のチェックで有効データは山手48，下町51，計99組であった。

回答はそれぞれ集計，素点算出の上，子の発達状況，発達の型，親の直接の養育態度，意識等の得点から，その特性を，第一子および二子，性別，家庭と園保育の比較を行った上で，昨年の乳児期の状況と比較した。

(4) 親の養育態度の乳児期と幼児期の比較では，乳幼児期ともに，家庭保育と園に託しての保育の親の間の差は少ない。差は，むしろ第1子と第2子間にある。養育態度全体をパターンとしてとらえた時に，乳児期のそれとは，かなりの類似がある。親の意識の差は，両群に，乳児期ですでにみられていたが，幼児期での差は，これよりも著しくなっている。

(5) 子の精神発達は，乳児期にみられた，家庭児群の高得点傾向がなくなって，両群同じようになり，特に基本的習慣の自立を含む新たに設けた行動発達得点は，園児にはっきりと高くなっていることがみられた。

発達の仕方を型としてとらえた時，乳児期では，10種の型が分類されたが，幼児期では理論的にはありうるこの10種のうち，7種はほとんどみられず，3種と

その派生型または亜型とみられる5種にとどまった。

(6) 今回対象を幼児前期としたことにより，乳児期にはあらわれない児の発達の大きな問題と目される，子の反抗，甘え，分離の3項目をその態度測定に付加した。またこの年齢のこの種の問題の評価手続きとしてしばしば用いられる，エイレズワースの新奇場面(stranger situation)法についても，対象児の一部に実験として施行した。

これらの結果，子の態度差は，性別，出生順位，家庭児，園児等の関連は特にみられなかったが，項目ごとの高得点群および低得点群間とにいくつかの差が認められた。

分離実験は施行対象数がまだ少ないこともあって，質問紙による，甘え，分離，反抗得点との関連や，親態度との間の一定の関係はいまだ見出されていない。

今後の課題

今回の分析を通して，この種の研究の際の操作の問題の意味について考えさせられるところが多かった。

質問紙を作製し，親の態度や子の発達をとらえることも，一応，統制されたとみられる実験場面で表現される，ある具体的な行動や態度の評価を通しても，その行動を発現させるものの質的なところをとらえることの難しさを痛感した。これらの困難をふまえた上で，この母子相互関係の表面にあらわれる，またはとらえられる多数な型の基になる質的な差異を，どのようにしてとらえるか。その構造把握が，今後の大きな課題であろう。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

目的と課題

母子相互関係と子の精神発達との関連の仕方について,乳児期の間に成立,展開されてきた相互関係は,その後の子の発達に伴って変容をとげていくのが一般的なことと考えられるが,この子どもの成長に伴う関係の変化は,初期の両者の関係の型といかなる関連があるのか。また,乳児期の母子相互関係と子の精神発達との間にみられる関係は,その後も,同じような関係の仕方をするのか,それとも,関係の仕方そのものも変化するのか。

このような設問のもとでの母子相互関係の変容と,子の発達との関係の変化または連続性の検討が,この研究の三年連続のテーマであった。

本年度はそのなかで,第一年度に一応分析を終えた乳児期(9ヵ月〜1歳3ヵ月)における母子関係が,2歳の時点では,どういう関係となるのか,その連続性または変化の仕方を中心に分析を行なうことを目的課題とした。